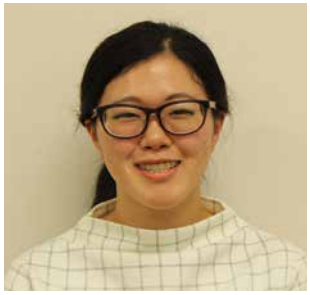
TEI 鼎談 DAN
学問と職業のカンケイから、大学進学を考える本

あなたは、まだ何にだってなれる。

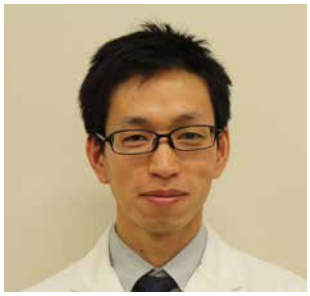
# 東京医科歯科大学 医学部

2016年版QS世界大学ランキング医学分野日本第4位に輝く本学は日本の医療を支える誠実な医師の育成と同時に、東京の中央に位置する利点を活かした多様な研究の実施や国際的なフィールドで活躍できる人材育成にも力を注いでいます。



■大学生
夏木茜 さん

■先生
森尾友宏 先生



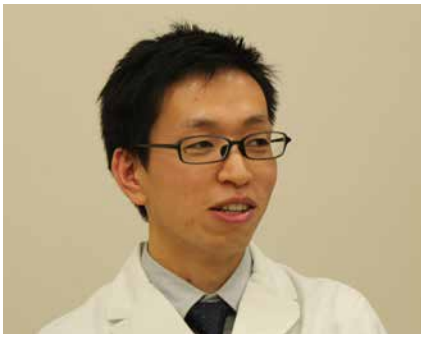
■卒業生
山下基 さん

CONTENTS

●プロフィール　●大学生活について　●就職活動、仕事について
●5年後に向けて　●高校生へのアドバイス

## ●プロフィール

### お二人が医師になろうと思ったきっかけを教えてください。



■卒業生
カエルや昆虫をつかまえるのが好きな子どもでした。その影響もあったのでしょうか、高校になってから、ずっと考えていたのは生物学の道でしたが、３年生の時の体育の授業中にケガをして入院することになりました。その時に親身になってお世話をしてくださったお医者さんの姿がとても強く印象に残り、医学の道も興味深いと思ったのがきっかけです。よくある話ですが、入院生活の中で本当の医学の世界やリアルな医師の仕事に触れて感銘を受けたというか。

■先生
もともとの目標が切り替わってしまうほどの体験だったんだね。

■大学生
いくつか志望の理由はあるのですが、私もお医者さんへの憧れという部分では、少し似ているかもしれません。

■卒業生
そうなんですね。もしかして入院ですか？
■大学生
私の場合は入院というより通院ですね。小さな頃、よく風邪をひいたりして、病院に足を運ぶ機会が多かったのです。その時の小児科の先生がとても大好きで、私もこの先生みたいになりたい！そんな憧れのようなものが、きっかけのまずひとつ。もう一つは、両親と見ていたアメリカの医療ドラマの影響ですね。俳優さんが演じる小児科医が不測の事態に対応する姿がとにかくかっこよかった。
■卒業生
ER を舞台にしたドラマですね。僕もなんとなく覚えているなぁ。
■大学生
そういった体験もあり、漠然と医師になりたいって夢はありました。
■先生
なるほど、医学部への進学は自然な流れだったんだね。
■大学生：高校で進路を決める際、迷った時もありましたが、偶然にも自分の身の回りに結構医学部志望の人が多かったので、その流れに私も自然に乗れた感じではありますね。一度、医学部のキャンパス訪問に行った時、「なんで医者になりたいんですか？」と大学生の方に質問したんです。その方は、医師になって発展途上国のために働けるようになりたいっていう夢を語ってくださったのですが、その話にとても感動して、自分も医師になる決意をしたのです。

**世の中にたくさんある医学部の中から、東京医科歯科大学を選んだのはなぜだったのでしょうか？**

■卒業生
確か高校が主催したイベントだったと思います。さまざまな大学や学部に進んだ先輩が実際の大学生活を語るというものがありました。私は医師になることを決めていたので、医学部の方に話を聞きにいったら、偶然にも私の高校の卒業生だったのです。東京医科歯科大学に進んでいたその先輩から、学びやキャンパスの特徴、海外留学に強みがあることを教えてもらったのです。

■先生
いろんな話を聞いて、夢が広がったのでしょうね。
■卒業生
それはあると思います。ちょうど、その先輩は東京医科歯科大で実施しているイギリス留学から帰ってきたばかりで、グローバルな視点で日本の医療や医学生としての日々を話してくださって、単純にかっこいいな、自分もこんな人になりたいと思ったのです。
■先生
夏木さんの場合は？
■大学生
どの大学にするかを迷っていた時に「東京の最高峰の学校で学びなさい」との助言を両親から受けました。東京医科歯科大学は国内でもトップレベルの学びの環境が整っていますし海外留学の制度も充実していることに加え、座学にかける時間を少し短くして、その分を患者さんと向き合う時に

欠かせない臨床の知識や経験を積む時間にかけるということを知ったのでこちらに決めました。

■卒業生

臨床の時間の長さもさることながら、東京医科歯科大学の臨床教育や病院における実習教育は、もともとハーバードや海外の大学のシステムを参考にした先進的なプログラムとなっていると聞いています。他の大学の医学部に進んだ友人などから聞く話の中でも、東京医科歯科大学は良質な教育をしていたんだということを言葉の端々に感じたこともあります。

■先生

プロジェクトセメスターについても興味を持っていたよね。せっかくだから夏木さんから、その仕組みについて教えてもらえるかな。

■大学生

わかりました。なんだか緊張しますね。プロジェクトセメスターは、4年次の後期の約半年間、自分が興味を持った分野について集中的に学ぶ仕組みです。その期間中は通常の授業はまったくないことも特徴です。半年間の自由研究期間といったほうがわかりやすいでしょうか。その期間中に海外の病院での研修にチャレンジすることもできます。

■先生

ちょっと補足すると、海外研修の場所とは、イギリスのインペリアルカレッジ、チリのクリニカ・ラスコンデス、ガーナのガーナ大学野口記念医学研究所、タイのチュラロンコーン大学などで、いずれも当大学の国際交流協定校です。

**そういった取り組みへの評価も2016年版のQS世界大学ランキングの高順位の獲得につながっているのでしょうか。**

■先生

もちろん、影響はあると思います。QS世界大学ランキング（QS World University Rankings）は英国の世界大学評価機関のクアクアレリ・シモンズ（QS）が毎年発表している大学ランキングで、世界で最も広く使われている大学評価指標のひとつです。細分化された分野の中で、医学分野は日本第4位に、歯学部は日本第1位を獲得しています。

■卒業生

こういう評価を見ると、やはり自分の受けてきた教育は間違いなく日本の中ではトップレベルの教育だったと感じますし、それには誇りを持っています。

## ●大学生活について

**現在、どのような学びや活動を通じて医師免許取得を目指しているのでしょうか？普段の学生生活について教えていただけますか？**

■大学生

今、最も力を入れて取り組んでいるのは病院実習です。基本的には学生は現役の医師と同じカンファレンスや治療に参加、見学するところから始まります。手術とか患者さんの処置とか、あとは外来の新しい患者さんの診断など、いわゆる医師の仕事を現場で体験していきます。

■先生

カルテをチェックしたり、患者さんの様子を見ることもあるよね。

■大学生
学生それぞれが患者さんを受け持っていて、毎日その方の診察をしたり、検査結果をチェックしてカルテに書いたりします。

**診察をするのですか？本格的ですね。**

■大学生
いえいえ、採血や注射、手術などの本格的な医療行為はまだできません。例えば、血圧測定や触診を行ったり、毎日の脈を測ったり、糖尿病や心臓疾患の患者さんに発生しがちな足のむくみが出ていないか？悪くなっていないか？といったものを診察してカルテに記載するのです。

**疑似的に診察するんですね。**

■大学生
そうですね。診察に必要な知識などは、実習に出る前に一通りすべてマスターすることになります。自分がとった診察の結果やカルテを踏まえ、患者さんはどういう状態かを判断、今やっている治療の効果の是非や、これから何をするべきかを考えていき、それらを指導医の先生に評価していただくのが基本の流れです。

■卒業生
受け持つ科によって、見るものも考えることも全く違いませんか？非常に勉強になっているのではないでしょうか。

■大学生
確かに違いますね。内科は先ほどお話しした疑似的な診断やカルテ作成といった部分に比重がある。一方、外科になると主に手術見学がメインとなりますね。

**内科、外科と出ましたが、学生それぞれに配属先が決まるのでしょうか？**

■大学生
４年生までは医学や臨床の基礎をみっちり学び、５年の４月から病院での実習がはじまりますが、いくつかの診療科を選択することになっていて、ひとつの科を４週間ほど回る機会が設けられています。普通の大学の医学部は２週間ほどですが、東京医科歯科大学ならその倍の経験を積むことができるのも特徴です。

■先生
最初に病院に配属された時はどうでしたか？緊張したでしょう？

■大学生
一番最初に患者さんの診察をした時はとにかく不安でした。学校で診察の知識を学んではいたものの、本当にこの診断で合っているだろうかと半信半疑。これまでクラスメイトを練習台に経験を積んだわけでもありませんし。患者さんが、「この学生さんは、何をやってるんだろう？」とか思われてないかなっていうのはずっと心にありましたね。あとは、実際の医療の現場の慌ただしさには驚きました。ナースステーションに行くと看護師さんがすごく忙しそうに動き回っていらっしゃるんですけど、自分がどこに居たらいいのかもわからなくて。その時いっしょに配属された仲間と「とりあえず、邪魔にならないように端っこにいよう」と会話したのを覚えています。

■卒業生
最初は誰もがそうだと思います。私もそうでしたから。
■大学生
まさに今、臨床実習の真っ最中ですが、ようやく病院の雰囲気にも慣れてきて、慌てなくなってきました。救急外来の患者さんを受け入れた際、最初は「ああどうしよう！」と、担当医の先生や先輩に聞いてばかりでしたが、今は一旦落ち着いて、患者さんの様子は？今すぐ先生を呼んで何かしなきゃいけないことなのか？といったことを、立ち止まって考えてから動けるようになってきました。
■先生
それは大きな成長だよ。まずは冷静に。そして適切な方法を考えることは医師の基本中の基本だからね。

**医師を目指すためには、たくさんの知識を学ぶ必要があると思います。数ある授業、カリキュラムの中でも、印象に残っているものを教えてください。**

■大学生
人間がどのようにして動くかを学ぶ座学は興味深かったですね。その延長線上にある解剖の授業は解剖学の本に載っている写真だけだとわからない体の中の立体的な構造も理解することができた貴重な時間でした。その時の解剖の先生が、ご自分の臨床医時代の経験などもお話ししてくださったことも印象的でした。実際の医療の現場では、教科書通りにいかないことをしっかりと学ばせていただきました。

**どんな雰囲気の学生が多いでしょうか？校風は？**
■大学生
まじめな人が多いと思います。ほかの大学出身の先生方には、「東京医科歯科大学の学生さんは本当にまじめにやるんだね」とおっしゃいますよ。
■卒業生
私が思うのは、やる気がある人が多い印象です。ですが、決してまじめ一辺倒というわけじゃなく、普段の授業も留学もせっかくのチャンスだから全力でがんばるぞというイメージ。バイタリティあふれるという言葉がピッタリなのでは。

**東京医科歯科大学　医学部の魅力を教えていただけますか。**
■先生
それについては、学びの環境、グローバル、立地環境の３つからお伝えできると思います。立地環境については山下さんの今の研究とも関わりがあるから、説明はお願いしようかな。
■卒業生
わかりました。
■先生
それでは、まず学びの環境について。日本の医学教育のベースともいえるカリキュラムを東京医科歯科大学が作ったと言われています。常に最新の設備を整え、学生にとって最適な学びの場をつくることには昔から力を入れています。生徒あたりの教員数も日本ではトップクラスで、顔の見える距離で密な指導が行えることも特筆すべき部分です。

■大学生
すぐに質問ができるのはもちろん、教員の方々からも気軽にお声かけいただけています。
■先生
グローバルという観点からは、先ほど彼らから話があった、海外の病院での実習に加え、英語力習得に関するカリキュラムも積極的に実施しています。

## 医療と英語の関係が以前よりも密接になってきたということでしょうか？

■先生
おっしゃる通りです。今の医療の現場においては、これから学校を卒業して医者になったときに世界を見ざるを得なくなっているんですね。医療の最新情報も世界から発信されてくるし、英語でやり取りする機会も増えてくる。日本だけが孤立するっていうことは想像し難いので、若いうちから世界の医療現場や医師と接点を持つことは大事であることは間違いないでしょう。大学で勉強中の学生にそういった体験をさせる是非については、賛否両論あると思いますが、東京医科歯科大学では、やはりグローバルな視点で人材育成をしたほうが良いと考えています。
■大学生
私の後輩世代から HSLP という完全英語履修のリーダー養成選抜プログラムがスタートしていますが、とても素晴らしいものだと後輩から聞いています。
■先生
HSLP は Health Sciences Leadership Program の頭文字を意味しています。簡単に言うと、生命や医療に関する研究や産業の現場をグイグイと引っ張っていける国際人を養っていきます。
■卒業生
ここでも英語とグローバルがキーワードですね。
■先生
ただし、英語といっても、単純に医療を英語でやるという側面よりも、コミュニケーションスキルを用いて、各国の医師やその国々が直面する医療の課題にどう向き合う知識と行動力を養うほうがウエイトとしては大きいです。世界の研究者と肩を並べて研究や臨床をする時、社会的な事情や医療面での環境、医療における理念的なものなど、いろいろな課題と直面することになります。それを英語でディスカッションしながら、文字通り手に手をとって連携することができる人材育成が目標です。

## 本当の意味での海外で活躍できる医師を育てていくカリキュラム、いったいどのようにして進んでいくのでしょうか？

■先生
座学あり、実習ありでひとくちに言い切れませんが、大きく特徴的なのは、さまざまなテーマに基づくディスカッションでしょうか。例えば、ナイジェリア奥地の部族の村にワクチンを導入しようと考えます。しかし、同時に導入が困難な事情も浮き彫りになってくる。例えば医療費が不足しているといった経済的な部分、ワクチンの効果についての説明手法。そもそも注射自体っていうのが文化として嫌だったらどうするか？さらに言うと、医療を推進する政府側と伝統を守る側のように部族内での対立があったら、君たち医師はどう進めれば良いか？のような事案を題材にして皆でディスカッションします。このディスカッションの過程で、自分の意見をまとめちゃんと述べる力をつけることが HSLP の学びの一つの到達点となります。

## ●就職活動、仕事について

**先生から学びの環境とグローバルという側面についてお話を伺いました。それでは山下さん、立地環境の魅力とあわせて今のお仕事について教えてください。**

■卒業生

私も先生も小児科医なのですが、今、共同で先天性免疫不全症という、遺伝的な異常についての研究を行っています。病気の原因にはいろいろありますが、大人の病気の原因は、大人になることによる体質の変化、食生活の乱れや運動不足といった後天的な影響も関係してくる。その点、子どもの病気の場合は、そういった要素が少ないため、病気の原因の根本を遺伝子レベルで突き止めやすい傾向にあります。ですから、難病で苦しんでいる子どもたちの疾患をしっかりと研究することは、子どもたちを救うのと同時に、大人の病気の発症を突き止めることでもあり、その研究においてこのキャンパスのある御茶ノ水はとても好都合なのです。

■大学生

キャンパスが東京のほぼ中央に位置することに関係が？

■卒業生

その通りです。JR 御茶ノ水駅という極めて利便性の高い駅のそばにあることで、この周辺だけでなく遠方からも患者さんが来院されます。またインターネットを使った相談窓口も開設しているので、全国から相談と検体が寄せられています。結果的に日本中の免疫不全症の半分くらいの方の診察を東京医科歯科大学は担当させていただいています。常に新しい情報に触れ、同時に希少な症例を目の当たりにすることは、学生にとって、非常に貴重な体験になると思いますよ。

■先生

おおげさではなく、まだ世の中に存在しないものを見つけたり、病気の原因を突き止められるかもしれないのが免疫学の世界なんですよ。

■卒業生

卒業して２年は病院勤務、そこから大学院に戻ってきて、今の研究に参加しています。大学院を卒業すると同時にまた医師に戻るのですが、この研究はずっと続けていきたいと考えています。あとは東京医科歯科大学の教員になり後輩の育成にも興味を寄せているところです。

**卒業生で、海外で活躍している方はいますか？**

■卒業生

海外でずっと研究に携わったり、アメリカで臨床医師として働いてる人はいますよ。

■大学生

私は、JAXA で活躍している先輩の話を聞きました。フライトサージャンという宇宙飛行士の主治医のような役割です。普段は地球にいて、宇宙にいる宇宙飛行士と交信して体調管理を行っているそうですよ。

■卒業生

医師として、研究員として、医療をキーワードにいろいろな分野に進んだ人は多いですよ。世界トップクラスの電機機器メーカーと共同で検査機器の開発をしたり、免疫関連の治療薬の開発などがそれにあたります。

## ● 5 年後に向けて

**今後の目標について教えてください。**

■卒業生

そうですね、今やっている研究をしっかり成果を出すっていうことがまず第一。いずれは、先ほども申し上げた通り、臨床と研究と教育の３つをやりたいと思っているので、大学病院だとか大学に関連する研究所で働いてみたいですね。

■大学生

まずは医師免許取得を目指して勉強です。関心があるのは小児科のほうなので、大きくそちらに進路をとりつつも、専門医の資格をとったら、一度大学院に入って、研究もやってみたいなと思っています。

■先生

子どもたちの病気の領域になってしまいますけれど、やはり今、原因がわからず苦しんでいる子どもたちがたくさんいて、その中の一部が亡くなるという痛ましい出来事も少なくありません。私を含めた医療に関わる人は、やはりそれらの原因をまず明らかにしたいと思う気持ちを持っています。子どもたちが何の心配もせず元気でいられる新しい医療や新薬開発の一翼を担えるようにこれからも取り組みたいと考えています。もし、もう一度医師として新たなスタートをきることになり、子どものための医者と大人やご老人のための医者のどっちに進むかと聞かれたら、何回選んでも子どものための医者だと答えると思います。やはり生きるものの一番の命題は世代をつなぐことですから、もっと子どもが大切にされるような世の中を見てみたいし、その実現に向けて微力ながら尽くしたいです。

## ●高校生へのアドバイス

**受験のアドバイスなど、高校生へのメッセージをお願いします。**

■大学生

受験科目はどうせ勉強すると思うので、私は受験じゃない科目を勉強するのが良いと思います。特に世界史や日本史などです。

■先生

自国のことはもちろん、世界の動きを知っていることは、いざ自分が世界に出たときにその学びの意味を知ることになると思います。

■大学生

いろんな学科の人と会話をしたり、自分で海外旅行とかよく行くようになって、教養がないことは、本当に不利であるとつくづく思います。歴史を知らないって、かなり致命的だと痛感しています。

■先生

それは決してグローバル目線でなくとも重要で、例えば患者さんと話をするとき教養がないと、対応がおぼつかないときも出てくる。いろんな知識や話題のポケットを持っていることは実は医師として大事なことなんですよ。

■卒業生

そういう意味では、森尾先生はすごいですよ。いつも気がつくとスーッと患者さんや学生たちと自然な距離感で会話をされている。

■先生
勉強についてアドバイスを送るとすると「積み重ねを大切にして欲しい」でしょうか。表層的な理解じゃなくて、一つひとつ丁寧に理解するクセをつけることが大事。しっかりとした理解は確固たる知識としてみなさんの底力になっていきますからね。

**最後に伺います。みなさんが思う東京医科歯科大学の魅力はどこでしょうか？**

■大学生
自分がやりたいと思ったことは、だいたい東京医科歯科大学に居たらできると思います。研究や臨床実習の場面でなにかチャレンジしたいことがあっても、自分から何かしたいと手を挙げれば、基本的にノーと言われることはほとんどない校風だと感じています。自分の可能性を広げる場所としては一番いいかなと思っています。

■卒業生
海外や広い視野での活躍も魅力ですが、もっとシンプルに正統派のお医者さんになって人や社会の役に立ちたいという方にとっては最高の環境が整った学校だと感じています。

■先生
私は人ですね。今、入ってくる学生たちが素晴らしいと素直に思っています。非常に伸びしろがある方が多く、立派な医療従事者へと成長してくれると信じています。環境や設備ももちろん大切ですが、医療の発展は人が全てだと思っています。幸運にも、東京医科歯科大学には、医療に対して高い志を持っている学生が集まってくれている。教える側も学ぶ側も少し高いところを意識しながら学びの時間を積み重ねていることが最大の強みだと思います。

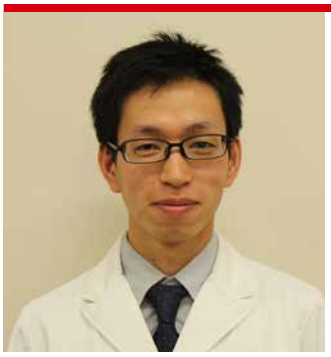
## ●インタビューに答えていただいた方々●

■先生

### 森尾友宏先生

東京医科歯科大学医学部教授

静岡県立沼津東高等学校出身。東京医科歯科大学医学部医学科卒業・同大学大学院医学研究科博士課程修了。1983 年東京医科歯科大学 (TMDU) 医学部小児科入局（研修医）、1991 年米国ハーバード大学小児科、ボストン小児病院免疫学部門・博士号取得後研究員→講師 (1994.06 ～ )、2001 年 TMDU・医学部総合診療部･助教授、2004 年 TMDU･大学院･発生発達病態学分野･准教授、同医学部附属病院・細胞治療センター長、2014 年 TMDU・大学院・発生発達病態学分野・教授、2015 年 TMDU 副理事、2016 年同学長特別補佐、副医学部長。

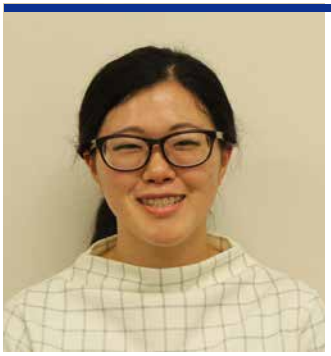


■卒業生

### 山下基さん

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科博士課程

国立筑波大学附属駒場高等学校出身。東京医科歯科大学医学部医学科卒業。2 年間の病院勤務後、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科にて発生発達病態学分野の先天性免疫不全症について研究。大学院卒業後は、医師として病院に勤務の予定。



■大学生

### 夏木茜さん

東京医科歯科大学医学部医学科 5 年生（2016 年度取材当時）

私立桜蔭高等学校出身。中高時代はバスケットボール部の活動に加えて、体育祭の実行委員を 6 年間務める。大学入学後は、春休みに語学留学・プロジェクトセメスターで研究留学と海外生活にチャレンジ。東京医科歯科大学の魅力は、留学制度が充実していること、そして座学の時間を短縮し、臨床実習に時間をかけるなど合理的な仕組みがあることだという。